

病気やけが、高齢の保護猫

同市好摩（こま）の閑静な住宅街の一軒家。1階の猫専用の2部屋にはキャットタワーやケージが備え付けられ、現在は10匹の猫が暮らしている。腎臓病で定期的な点滴が必要だったり、交通事故でけがを負っていたり、人や他の猫に慣れていなかったりと、皆特別なケアや配慮が必要な猫だ。

食事や排せつの介助など付きつきりで見守るのは、館長の千葉俊喜さん（38）。祖父母が残した家を1年半かけて改修し、もりねこに提供した。幼少期から30年以上猫と暮らし、腎臓病の23歳の愛猫の自宅治療とみとりにを経験するなど猫への理解の深い専属スタッフだ。「ここ」で猫たちが快適

ケアホーム開設



保護猫の特別ケアホーム兼老猫ホーム「しっぽのおうち」で猫を見守る千葉俊喜館長（右）と工藤幸枝理事長

幸せなニャン生（にゃんせい）を

盛岡「もりねこ」

猫の保護や「里親」への譲渡に取り組むNPO法人もりねこ（盛岡市、工藤幸枝理事長）は、保護猫の特別ケアホーム兼老猫ホーム「しっぽのおうち」を開設した。病気やけが、高齢などで特別な世話が必要な猫たちを集中してケアする。将来的には世話ができなくなった高齢者からの引き取りなども視野に、猫たちが最期まで安心して暮らせる環境整備を進める。

に過ぎず、幸せなニャン生（にゃんせい）を全うしてくれることとが願い」と人生を猫たちにささげる覚悟だ。

特別なケアが必要な猫は世話の労力や医療費がかさみ、みどりの精神的負担から譲渡も難しい。もりねこも保護してきたが、多くの猫が入れ替わる中で、落ち着いてケアするのは難しかった。工藤理事長は「思ったように手をかけてあげられず、私もスタッフもつらかった。やりたくてもできなかったことを館長が実現してくれている」と目に涙を浮かべ感謝する。

飼い主亡き後、残された高齢のペットの居場所づくりは課題だ。工藤理事長は、ペットに財産を残し信頼できる飼い主に飼育してもらう「ペット信託」などを用いて、いずれは一般からも受け入れたい考えだ。「どうしても手放さなければならぬ」とはあきらめない。そんなとき、猫が安心して最期まで暮らせる場所が必要」と語る。

（飯倉ゆり）